

『寝ても覚めても』と『ドライブ・マイ・カー』における アダプテーション手法 —— 「往還」する行為を中心に

瀬古 知世 (神戸大学)

『寝ても覚めても』(2018)と『ドライブ・マイ・カー』(2021)に共通するアダプテーション手法は、映画オリジナルの要素として、主要登場人物による「往還」する行為を描写していることにありと考えられる。近年、小説や漫画、アニメなどの作品を原作とした映像化作品は珍しくない。濱口竜介の監督作品である両作品もまた、小説を原作とした映画である。しかし、両作品に採用されているアダプテーション手法は、原作を媒体を変えた上で反復するというものではなく、原作となる作品を映像にしたときにどのように表現できるかに重きを置くというものである。「往還」する行為とは発表者の造語であり、物語内で登場人物たちの認識が変容するような「往って還ってくる」移動のことを指す。

『寝ても覚めても』は柴崎友香の同名小説(2010)を原作としている。主人公の朝子が恋人で数年前に突然去った麦とそっくりな顔の亮平に出会い、恋愛関係となるという物語である。原作においても映画においても印象的な場面として、朝子は亮平の元を離れ、麦との逃避行へ出るが、途中でこれを放棄して亮平の元に還る場面が描かれる。映画において逃避行先の東北から亮平のいるところに「往って還ってくる」ことは、朝子がそれまでにあった「麦=亮平」という認識を否定するために必要なことであった。このように、『寝ても覚めても』における「往還」する行為は映画の根幹に関わり、朝子の主体性を表わす点で表現方法は異なるものの、アダプテーション作品という点で重要な要素であると考えられる。

もう一方の『ドライブ・マイ・カー』は村上春樹の短篇集『女のいない男たち』(2014)の短篇3作品を原作とした作品である。妻を亡くした俳優兼演出家の家福は広島舞台芸術祭に招聘される。そこで家福のドライバーを担当することになったみさきと交流することで妻を亡くした喪失感に向き合っていくという物語である。「往還」する行為は本作においても重要な要素となっており、その点で本作は一種のロードムービーとも捉えられる。ロードムービーの起源はアメリカに認めることができ、翻って村上春樹の作品における「往還」する行為もまた移動を巡るアメリカ文学からの影響が認められる。つまり、映画『ドライブ・マイ・カー』は、村上春樹の作品から見て取れるアメリカ文学の影響を映像化した結果として、アメリカが先駆となった映画ジャンル、ロードムービーとなったのだと考えられる。したがって、映画『寝ても覚めても』『ドライブ・マイ・カー』の2作品には、映像化にあたり、差はあれど、独自のアダプテーション手法として「往還」する行為が採り入れられている。両作品はこの「往還」する行為を通じて原作を映像化した場合の可能性を示している点において非常に稀有な作品である。